

チェルノブイリ原発事故26周年

チェルノブイリとフクシマを結んで～子どもたちの未来のために～

4月・ベラルーシの被災地から

ベーラさん (小児科医) **バーリャさん** (元教師) をお招きしフクシマ交流訪問

フクシマとチェルノブイリの交流・支援に、引き続きご協力を！！

東日本を襲った大震災と津波、そして東京電力福島第一原発事故の発生から10ヶ月が経ちました。昨年末に政府は「事故収束宣言」を出しましたが、実際には事故は収束してはいません。メルトダウンした原子炉や使用済み核燃料は冷やし続けなければならない、未だに放射性物質を環境に放出し続けながらの「綱渡り状態」が続いています。

私たちは20年間、チェルノブイリ原発事故のヒバクシャ支援・交流を続け、「繰り返さないでチェルノブイリ」と訴えてきたにもかかわらず、チェルノブイリ事故に並ぶような放射能汚染と被ばくをもたらす原発事故がフクシマで起きることを防ぐことができませんでした。その現実を前に、悔しさと悲しみを感じながら、私たちのこれまでの「チェルノブイリ支援」の経験を活かして、少しでもフクシマの被災者の方々の被ばくを減らすために何ができるか？健康と生活を守るために何ができるか？自問しながら現地を度々訪れ、また被災者の方々を関西にお招きしてお話をお聞きして交流したりしながら「模索」してきました。チェルノブイリでの保養支援の経験から、夏に京都の若者が中心になって取り組んだ「保養キャンプ」にも協力しました。

チェルノブイリと同じく、今後のフクシマでも放射能汚染と被ばくは長期にわたると考えられます。被災者の健康と生活を守るための国の責任による適切な施策（被災者全員の無料検診や医療補償行うなど）を、被災者とともに国や県に求めてゆくことも必要です。そして、このような原発事故をこれ以上繰り返させないために、脱原発とエネルギー政策の転換を求めてゆかねばなりません。フクシマを「核時代」の終わりの始まりにしなければなりません。

25年を経たチェルノブイリの被災地では、健康被害、経済的被害が続いています。甲状腺がん以外の被ばく健康被害は、これからもさらに明らかにされることでしょう。昨年現地訪問では、「チェルノブイリの痛み」が、まだ癒えることなく続いていることを実感させられました。（「現地訪問報告」参照）

そんな中で、ベラルーシの被災地の友人たちは、フクシマの被災者の方々のことを隣人のように感じ、気遣ってくれています。そして、ともに困難と闘いながら未来に向けて歩いてゆこうと励ましてくれています。

チェルノブイリとフクシマ。事故の経緯や社会歴史的背景は異なり、汚染の広がりや被ばくの状況には共通点もあれば相違もあります。フクシマが今、直面している多岐にわたる問題--被ばく防護、除染、汚染食品の管理、健康管理・医療、環境モニタリング、避難・保養、経済的復興、事故原発での作業、労働者被ばく、等々--に立ち向かうためにも、私たちが「チェルノブイリの経験」から、改めて学ばねばならないことが多々あります。

今年4月「チェルノブイリ原発事故26周年」に、ベラルーシの汚染地から、私たちの親友でもあるクラスノポリエの小児科医ベーラ・ルソーバさん、チェリコフの元教師バレンチーナ・モロゾーバさん（バーリャさん）を日本にお招きし、ともにフクシマを訪問し、被災地の皆さんと交流したいと思います。フクシマでも「顔の見える関係」を大切に、チェルノブイリとフクシマの被災者の方々との直接の出会いの中で、経験を共有し、ともに困難を乗り越え、子どもたちに未来をつないでゆくことをめざしたいと思います。また大阪と福井でも集会などを企画し、関西でも原発の危険性を広く訴え、止めてゆく取り組みを強めたいと思います。

今年も、皆さんのご協力とご参加をよろしく願いいたします。

明けましておめでとうございます

いつもチェルノブイリ・ヒバクシャ救援関西にご支援頂き有難うございます。昨年は大変な年でしたね。3・11唯一の被爆国日本では起こってはならない事故で、強力な放射線が大地を汚し住民は居住地を離れ避難せざるはいられませんか。新しい年を迎えられた今日でも仮設住宅地で・・・。

私は長崎原爆で両親弟妹を失い、独り爆心地で過ごしました。当時の長崎医大の偉い先生方も放射能の事、判らず、市内は焼け残っているからいつ空襲を受けるか判らない。ここに居た方が安全だよと・・・。両親の真つ黒こげの死体に手を置いて寝て過ごしました。

チェルノブイリ事故が起こって3ヶ月後、ソ連邦（当時）に入り、被爆の過酷さ・悲惨さを話しました。当時の要人は「日本は敗戦で物資も医療品も不足していたからヒバクシャが出来た。ソ連はいち早く手を打ったからヒバクシャは出ないと逃げ口上でしたが・・・。10年経ってチェルノブイリに行った時、爆発した4号炉の中まで入りました。クラスノポリエでは、子ども達に被爆体験を話しました。後で聞いた話ではヘリコプターの操縦士が死亡した時、ソ連政府は放射体になっていると言って奥さんにも子どもにも会わず死体処理したそうです。

大阪で20年前にチェルノブイリ・ヒバクシャ救援関西を立ち上げ、ヒバクの先輩として交流し、子ども達にも語り合っています。被爆後66年経った今でも放射能は私の体から抜け切りません。生き残った私の使命として語り部となり世界各国（20ヶ国）を廻っています。

これからもチェルノブイリと福島を結び運動を命の続く限り続けます。ご支援の程よろしくお願い致します。

チェルノブイリ・ヒバクシャ救援関西



代表 山科和子 (90才)

盛況に

「発足20周年の集い」が開かれる



12月18日、大阪市立総合生涯学習センターで「チェルノブイリ・ヒバクシャ救援関西『発足20周年』の集い」が開かれました。若者から元若者まで約100人の方々が参加され、活気あるものになりました。

発足から早20年、もうそんなに経つのかというのが正直なところですが、ささやかながら、ここまで歩いてこられたのも、有形無形の多くの皆様のご支援・御協力に支えられてこそのことです。心から感謝もうしあげます。そしてこれからもご叱咤・ご支援・御協力をよろしくお願い致します。

私達は、今迄「繰り返さないでチェルノブイリ」と

訴えてきましたが、ついに私達の足元で「フクシマ事故」が起きてしまいました。本当に無念です。

集会では山科代表の挨拶、北日本大震災の犠牲となられた方々に黙祷を捧げた後、「発足20周年」を振り返っての報告、チェルノブイリ訪問報告と来年の取組みについて提案がありました。休憩



を挟んで福島から佐藤さんの報告と歌、「ゴーゴーワクワクキャンプ」の皆さんから子ども達の保養キャンプを実施するまでの経過と写真も使いながらキャンプでの奮闘の様子が紹介され、引き続き「ゴーワーク」のメンバーがユニークに一言ずつ発言。福井からは山崎さんが福井での活動の様子を報告してくれました。

全くの時間不足で質疑応答や討論が充分出来なかった事が残念です。この熱意と盛り上がりが続くし、チェルノブイリに学

びながらフクシマと結んで支援・連帯がより深まり、そして脱原発へと結びついていければと思わずにはいられません



「チェルノブイリ・ヒバクシャ救援関西」発足20周年を振り返って

*発足まで

・チェルノブイリ事故により、広島型原爆の数百発分（600～800 発分）にも相当する放射能が放出され、北半球が汚染され、被災3国（ベラルーシ・ウクライナ・ロシア）だけでも少なくとも800万人

もの新たな「ヒバクシャ」を生み出された。

・ベラルーシ・ウクライナ・ロシアの汚染地域ではとりわけ放射線の影響を受けやすい子ども達に小児甲状腺の増加などの健康悪化が出始めていた。

深刻な健康被害が出ていた。

・広島、長崎の「核の被害」を経験した日本の人々は、チェルノブイリの被災者の思いも受け止めてくれるのでは・・・との期待を現地の方々から聞いた。広島・長崎での放射線障害の実態とその治療などについての情報や支援も日本に求められていた。

・事故後5年目にIAEA（国際原子力機関）などがチェルノブイリ事故の放射能被害を隠蔽し原発推進「チェルノブイリでは被曝に直接起因する健康被害は出ていない」「汚染地での移住基準や食品規制を緩和すべき」と報告。IAEAの国際会議の議長は、当時の広島の放射線影響研究所理事長の重松氏。

・美浜原発2号炉での蒸気発生器の細管破断事故（2月）—炉心溶融寸前の状態へ。一歩間違えばチェルノブイリ級の大災害へ

*発足（1991. 11. 10）

・発足の思い：かってない規模の放射能被害に心を痛め、とりわけ何の罪もない未来を担う子ども達が放射能に蝕まれている現状を黙って見ている事はできない。日本でもチェルノブイリを繰り返してはならない。

[目的]

- ① チェルノブイリ原発事故による（ソ連の）ヒバクシャに対し、原発による放射能汚染と被曝に反対する立場から救援・支援を行います。放射能汚染によるこれ以上の被曝・被害の拡大を許さず、すでに受けてしまった被害に対する医療・生活・労働のすべてにわたる緊急の対策の施行と将来的な補償の確立に向けた、チェルノブイリ・ヒバクシャ自身の活動を支援します。
- ② チェルノブイリ・ヒバクシャの運動との交流を通じて、日本の被爆者の運動、ヒバクに反対する運動の成果と経験を伝え、現地の運動に活かしてもらうことをめざします。同時に私たち自身が、現地の放射能被害を知る中で日本での放射能汚染・被曝の危険性を広く訴えてゆきます。

[基本的活動]

① 支援・救援活動

- ・汚染地で緊急に必要なとされている物資（医薬品・医療機器・放射能測定器など）を送ります。
- ・これ以上の被曝と被害の拡大を避けるため、汚染地からの移住、非汚染食品の供給等、現地の人々自身の手で行われている具体的な活動に対する経済的支援を行います。
- ・チェルノブイリの被害に苦しむ人々に対して様々な方法で私達の思いを伝える等、精神的支援にも取り組みます。

② 交流活動

- ・チェルノブイリ・ヒバクシャや現地で支援活動に取り組んでいる人々との交流を深め、日本の被爆者の運動・被爆者医療、反原発運動、放射能の危険性を訴えてあらゆる被曝に反対する運動の経験・知識など、現地の人々の今後の運動の発展に役立つ情報を伝えてゆきます。

③ 日本で放射線被曝の危険性を広く訴える活動

- ・チェルノブイリの被害の実態を支援・交流活動を通じて、私達自身が学び、日本の多くの人々に原

発事故の深刻さ、日本で重大事故が起こってしまえば取り返しがつかない事を訴えたいと思います。そして日本で繰り返さないために共に行動してゆきましょう。

・「IAEA報告」のように、チェルノブイリの被害を否定し、覆い隠しながら原発を推し進めようとする動きが強まっています。それには日本の重松・放射線影響研究所長などの学者も積極的に協力しているのです。これらに対して、チェルノブイリ・ヒバクシャとともに、放射能被害の事実を示し、広く訴えていきましょう。

・チェルノブイリのような重大事故時には「初めの1年間で50レムの被曝に達しなければ住民の疎開は必要ない」などの内容を含む、国際放射線防護委員会（ICRP）の新勧告（90年勧告）を日本政府は国内法に取り入れようとしています。このことにも注目し、多くの人々に知らせ、ともに考え行動していきましょう。

***チェルノブイリ・ヒバクシャとの支援・救援活動—「お互いに顔の見える関係」を大切に**

被災地の人々の相談し、実情に合わせながら被災地で必要とされている物資を送る。また「心の支援」にも力を入れる。

- ・ 支援品—訪問・招待時の手渡し（医療品・医薬品等）→各地から郵送（衣料・学用品・ミルク等、）→物資の現地調達・保養支援・資金援助
- ・ 心の支援—折り鶴・キルト・文通等

全て、多くの方の支援・カンパにのみに支えられて続けられる。また各地で救援バザーにも積極的に取り組まれる。

***交流活動—「繰り返さないで、ヒロシマ・ナガサキ、チェルノブイリ！」が共通の思いに**

- ・ 代表訪問も合わせて毎年訪問。招待は7回
- ・ 訪問時は被災地での人々の生活、高濃度汚染地などを目の当たりにして取り返しのつかない放射能汚染の現実を垣間見る。被災地での生活が移り変わっていく様子も目にする。招待時は大阪・宝塚・神戸・奈良など関西各地、被爆地・広島、原発立地県・福井等を訪れ、放射能汚染の実態、健康被害のみならず生活困難、社会的差別などを訴えられる。次第に友情・信頼・絆が深まっていく。

交流を通じて、「ヒロシマ、ナガサキ、そしてチェルノブイリを結んで、核の軍事利用も平和利用も反対しよう」「繰り返さないで！チェルノブイリ」という思いが、ベラルーシの友人たちと日本の私たちとの共通の思いとなる。

***ヒバクの危険性を広く訴える活動**

- ・ 被災地訪問後は各地で報告会を行い放射能汚染と被害の実態を伝える
- ・ 被災地からご招待した時は各地で講演・交流会を開いた。
- ・ 5冊の報告集を作りひろめた。また、漫画本、作文集も作製。さらに子ども達の描いた絵や訪問時の写真をもとに、5組みの絵ハガキセットを作りチェルノブイリを訴えた。
- ・ 「ジュラブリ」を発行（84号まで）し、放射能被害の実態や会の活動などを伝えた。
- ・ 各地で開いたバザーでも、救援カンパを集める共に、チェルノブイリを訴えた。
- ・ 94年から毎年「反核フェス」に参加、舞台・パネル等でチェルノブイリ・ヒバク被害などを訴えた。

- ・事故10周年～15周年を関西の市民グループと共同行動・共同企画で取り組んだ。
- ・関電への申し入れ行動に参加した。

***阪神・淡路大震災—原発は大地震に耐えられない：「地震が原発を直撃する前に停止を」**

1995年1月に勃発した阪神・淡路大震災を教訓に、原発は大地震に耐えられないこと、政府の防災対策は役に立たないこと、また交通網の寸断で非汚染地への避難は極度に困難となり大量被曝の危険性、汚染地には救援は入れない事を訴えた。そして若狭でチェルノブイリを繰り返さないために「地震が原発を直撃する前に停止を」と等を訴えた。関電への申し入れ行動にも参加。

***JCO臨界事故—ヒロシマ・ナガサキ、チェルノブイリと東海村臨界事故被害を結んで：日本でも「ヒバクの切り捨て」を許さない**

1999年9月JCO臨界事故。日本の原子力開発史上初の急性放射線障害による死者を出す。大量被曝した3人以外は「健康被害は問題ない」として被害者には「不安対策」としての検診で被曝の被害をごまかし、幕引きをした。日本でも「ヒバクの切り捨て」を許さないと訴えた。

- ・2000年（14周年）：「臨界事故被害者の会・代表世話人」をお招きし報告・討論。
- ・2001年（15周年）：チェルノブイリの高汚染地からの移住者を招待し、関西各地に加え、現地東海村を訪問し被害者とチェルノブイリ・ヒバクシャの交流も行なった。この交流の中で重い口を開いて初めてご自分の被曝体験を話された被害者もおられた。
- ・2003年（17周年）：「臨界事故被害者の会」の会員のお話「JCO臨界事故の現場から」

***ピキニ50年、ヒロシマ・ナガサキ60年、チェルノブイリ20年を結んでヒバク被害のない世界をめざして—：「NOヒバク」「チェルノブイリは終わっていない」**

- ・若者と共に取り組む、「ヒバクの半世紀」を振り返り、その体験に学び、ヒバクを許さない思いと活動を繋いでいく。
- ・ピキニ水爆実験を学習し山科さんの被爆体験を聴き、「チェルノブイリは終わっていない」と訴える。

***国際的な取組み—IAEA等の原発推進勢力の事故の放射能被害の過小評価と隠蔽を批判し、被災者への補償を求めて：国際キャンペーン**

事故により原発への安全神話が完全に覆された中でIAEA等原発を推進しようとする人々は、明白になってくるどうしても否定できない健康被害だけを渋々認め一貫して事故の放射能被害を切り捨て過小評価してきた。事故後20年には低線量被曝の影響を切り捨てチェルノブイリを終わらせようとした。これを批判し被災者の国際的支援と救済・補償を求める「チェルノブイリの放射能被害を隠蔽し過小評価するIAEAに世界中から抗議の声を」「チェルノブイリの被災者への国際的な救済と補償を求める国連要請」を被災者や世界の反核の活動家・科学者と共同で呼びかけた。署名、国際会議で訴えるなど国際キャンペーンを行なった。

***東日本大震災と福島第一原発重大事故勃発（2011.3.11）：「核時代の終わりの始まりに」**

脱原発の運動にも積極的に参加。福島の子どもの保養支援にも協力。

2011年ベラルーシ訪問報告

チェルノブイリとフクシマをつなぐ旅

今回は、3月11日の東日本大震災と東京電力福島第一原発事故後初めてのベラルーシ訪問となった。フクシマのことを、チェルノブイリの被災者の友人たちも、とても心配し、フクシマの被災地の実情をとても聞きたがっていた。ベラルーシでは、フクシマの汚染地域での具体的な実情は、なかなかマスコミでも伝わってこない。汚染地図や私自身が測定した空間線量率、フクシマで実際に見聞きした皆さんの悩みの様々なこと―避難、除染、汚染食品、健康の問題など―をお話すると、「私たちもそうだった」「まるでフクシマが隣村にあるように感じる」と、涙を流して真剣なまなざしで聞いてくれた。そして「私たちの経験がフクシマで活かされるのなら」とチェルノブイリ事故当時のことを、いろいろと思い出して話してくれた。

「決して負けないで！私たちもこうして25年間、生きてきました」「人々は生きなければならないんです」「将来を信じて、楽観主義を忘れないで」と、フクシマの皆さんに伝えてほしいと言われ、その言葉に私も励まされた。ふと、「人類は生きねばならぬ」という広島の被爆者、森瀧市郎さんの言葉を思い出した。やはり、ヒロシマ、ナガサキ、チェルノブイリ、そしてフクシマは繋がっている。

ほんとうに「信じることのできる将来」を次の世代につないでゆくためには、「核の被害」を今度こそ最後にしなければならないと強く思う。 [報告：振津かつみ]

訪問目的：

- 1) ベラルーシのチェルノブイリ被災地の各支援先に救援資金・物資を届けること。
- 2) フクシマの汚染と被ばくの現状をふまえ、改めてチェルノブイリの実情について情報収集をする。
この点について、皆さんから頂いた「宿題」は下記。
 - * 移住/避難
 - * 汚染食品の測定と管理
 - * 被ばく防護
 - * 健康・生活保障
 - * ベラルーシの原発推進に関して
 - * 健康被害
 - * 除染
 - * フクシマについて
 - * 放射線の危険性に対する教育
- 3) 2012年春、「チェルノブイリ26周年」に、クラスノポーリエの小児科医ベーラさん、チェリコフの元教師バーリャさんの来日を要請。

現地訪問日程：

12月3日	関空発	ヘルシンキ泊
4日	ミンスク着／「移住者の会」のジャンナさんに話を聞く	ミンスク／マリノフカ泊
5日	ベルラド放射能安全研究所訪問／バザー用品買い出し 「移住者の会」のメンバーと懇談	ミンスク／マリノフカ泊
6日	マリノフカの市場の食品放射能測定所見学 「日本文化情報センター」訪問 クラスノポーリエへ移動／区長・副区長と懇談	クラスノポーリエ泊
7日	ソヌチカ幼稚園訪問／学校訪問	クラスノポーリエ泊
8日	障害者センター訪問／救援物資購入／ ノボ・キャンプの代表と会談／病院訪問	クラスノポーリエ泊
9日	ベーラさんにインタビュー チェリコフに移動／コロソク幼稚園訪問	チェリコフ泊
10日	プラレスカ（児童社会保護施設）訪問／救援物資購入 ノボ・キャンプ参加者と交流／バーニャ（ロシア・サウナ）	チェリコフ泊
11日	ミンスクへ移動／ベリニチの寄宿学校訪問	ミンスク／マリノフカ泊
12日	ターニャさんの墓参／ミンスク発	機内泊
13日	帰国	

ミンスクのマリノフカ「移住者の会」代表のジャンナさんのお話から

なぜチェルノブイリの教訓が活かされなかったのか、どうして日本政府は原発推進を続けるのか…

日本政府が、放射能汚染の情報や被ばくの危険性について、ちゃんと住民に知らせなかったことを知って驚いた。日本は民主主義国家なので、フクシマでは情報が隠されることなく迅速に知らされ、人々が被ばくから守られるものと思っていたのに…これでは私たちの時の「シナリオ」と同じだ。

3月11日の日本からのニュースに私たちはとてもショックを受けた。ミンスクは仙台と姉妹都市なので、地震と津波の被害を受けた方々に連帯する行事も行われた。原発の周辺から住民が避難しなければならなかったというニュースを聞いて、「チェルノブイリと同じ事になった」と思った。また「どうしてチェルノブイリの教訓が活かされなかったのだろう」とも思った。チェルノブイリの経験があり、また技術も勝る日本では、もっとまじな対応がなされるものと思っていたのに…。

フクシマ事故の後、ドイツの反原発運動の要請で、2回、チェルノブイリ被災体験を話しにドイツに行った。フクシマの事故でショックを受けたドイツでは、政府は原発の閉鎖を決めたのに、なぜ日本政府はそれでも原発を推進し続けるのか。

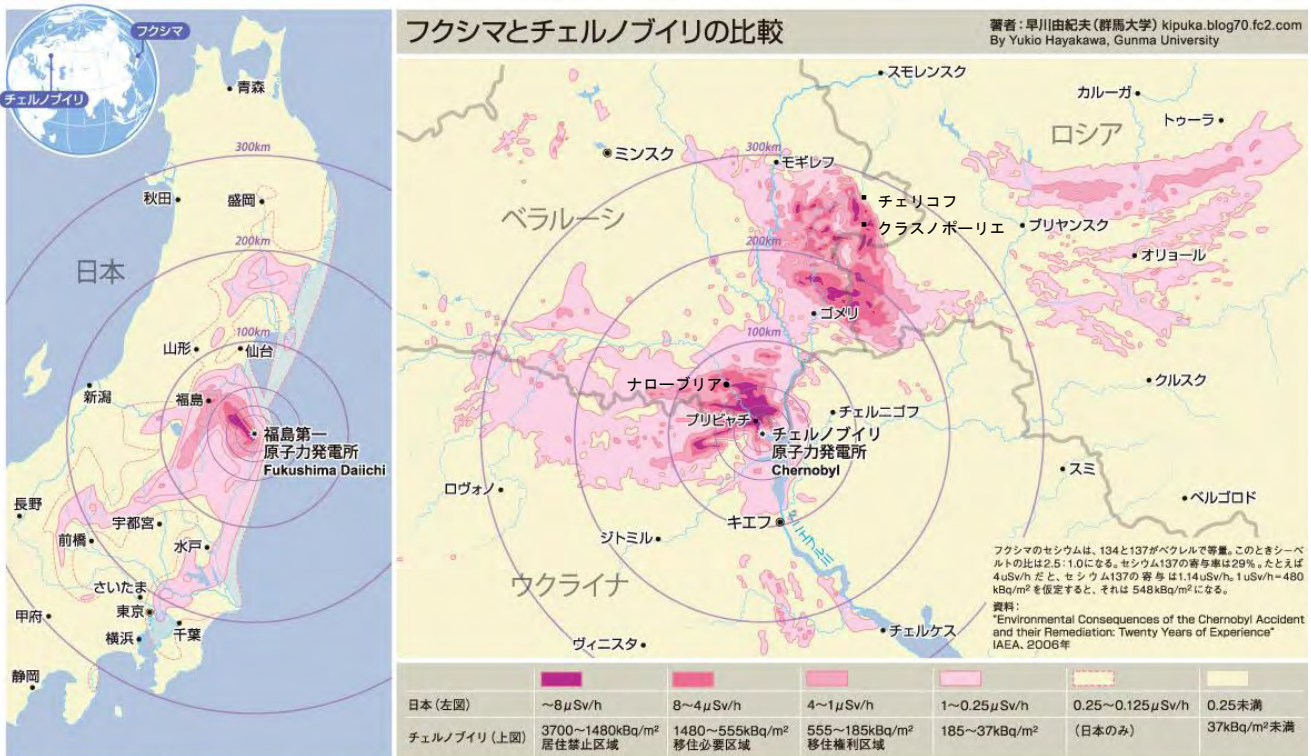
チェルノブイリ事故直後のことについては、まるで昨日のこのように当時よく覚えている。事故がおきたのは4月26日だが、30日になって初めて当時の大統領だったコルバチョフによる「チェルノブイリ原発で事故がおきたが、大丈夫です」というニュース報道があった。でも、それはウソだったことが後になってわかった。私自身は、当時住んでいたナローブリア（チェルノブイリ原発から北西約50km）からチェルノブイリ原発に働きに行っている人がいて、事故のことは翌日にその人から聞いてある程度は知っていた。日本での情報の隠蔽は、まるでベラルーシのようだ。

事故直後の子どもたちの避難

1986年の夏、9月の新学期が始まるまで、ほとんどの家庭では子どもたちをできるだけ遠くに避難させた。学校では9月に子どもたちが戻ってくるのに間に合うように除染をした。

5月4日、ホイニキ、ブラーギン、ナローブリアなど、ゴメリ州南部の村では、早朝に子どもたちが集められ、一時避難が始まった。3歳未満の子どもたちは、母親と一緒に、3歳以上の子どもたちは保育園や学校から集団で疎開した。1週間から1ヶ月の間、南方の汚染のない地域のサナトリウムに送られた。一部、親たちに子どもたちの行き先が知らされないようなこともあり、とても混乱していた。

私のふたりの息子はミンスクの研究所で体内被ばくの検査を受けた。長男のパーベルは（当時5歳？）1900マイクロレントゲン、アレクセイ（3歳？）は1400マイクロレントゲンの被ばくと言われた。（詳細不明）



改訂版 2011年12月9日 (初版4月15日)
この地図の作成には、文部科学省科学研究費補助金「インターネットを活用した情報共有による新しい地学教育」(番号23501007)を使用しました。
地図製図：秋原佳知子 (TUBE graphics)

危険性を知らされずに汚染した食品を食べ続けた

5月までは、食品の汚染については何も知らされず、ミルクも野菜も事故前と同じように食べていた。6月頃になって初めて、食品の放射能の基準が導入された。地方の新聞では、自分の家の牛のミルクをも、集団農場のミルクも飲んでではならないと報道された。制限されたのは、初めはホイニキとブラーグンだけだった。私の職場でも食材を運ぶトラックの荷台は、周囲から汚染した粉塵などが入り込まないように密閉されたものになった。しかしパンを運ぶトラックはそのままだった。

5月には畑の種まきをした。その後、政府からは「できた作物を食べないように」との指示が出たが、実際には危険性を知らされずに食べていた。

8～9月には、すでに無人になっていた30キロゾーンの村に豚のえさを取りに行った。放射能で汚染されて危険だということなど知識がなかった。また、「土曜労働」（勤労奉仕）でジャガイモを収穫しに30キロゾーンで働いたこともあった。

各地域に「衛生伝染ステーション」という機関が事故以前からあって、食品の衛生管理を行っていた。そこではそれまで放射能測定の実験も測定機器もなかったが、事故後、86年秋か、87年に入ってからだと思うが、いつからか正確にはわからないが、測定を担当するようになった。

1989年には、私自身もゴメリで講習を受け、職場で食品の放射能を測定するようになった。

高汚染地で暮らす～子どもたちを放射能から守るためにやったこと

事故後の一週間は、情報を知り得た関係者以外の一般の人々は、放射能から身を守るために何の対策もしなかった。その後は、個人レベルでできること一なるべく子どもたちを外に出さない、手や身体をよく何回も洗う、屋外の木になっているリンゴをもいで食べない、できるだけ汚染地の外に出るようにするなど一を、するようになった。服をよく洗い、掃除を丁寧にし、カーテンなども洗った。私自身は仕事でナローブリアを離れられなかったので、母親に頼んで子どもたちだけミンスクに疎開させた。

私は、春と夏が嫌いになった。というのは、冬の間は家の中で遊んでいた子どもたちが、春になると我慢できずに外へ出たがり、砂を触り、リンゴをもいだり、草花をつんだりして遊んでしまう。子どもを外で遊ばせるのが怖かった。外出はできるだけ短い時間に制限した。子どもには「外から家の中に放射能を運んでこないように」と、厳しく注意したが、子どもたちは何がおこっているのかよくわからないまま親の言いつけに従っていた。

5年後にミンスクに移住～孫には、放射能汚染のない故郷を見せてやりたい

私たちは、1991年になって政府から避難指示が出てからやっと避難できた。それまでも、子どものことを心配し、移住できる経済力のある人、身を寄せることのできる親戚のいる人は、「自主避難」した人もいた。当時、共産党員は移住する権利が与えられなかったので、党員証を捨てて自主避難する人もいた。資金もなく、親戚もいない人は、どうすることもできないまま、混乱していた。

1991年になって移住したが、お金も何もなく、移住前の給料の4ヶ月分が前金で支払われたきり。新しいアパートを受け取り、引っ越し費用(1回トラックを使う分だけ)が支給された。農民が多かったが、都市に移住して未熟練労働者として工場などで働くしか生計を立てる道はなかった。仕事も自分たちで探さねばならなかった。そんな中で、次第に同郷の移住者どうして助け合うようになった。

今年、「チェルノブイリ事故25周年」の行事をやった。今でも、いつも故郷に帰りたいたいと思っている。子どもたちにも故郷を見せてやりたい。夜には自分の故郷の夢を見る。その故郷が原発事故のために住めなくなってしまうなんて…。孫には、放射能汚染のない故郷を見せてやりたい。

ベラルーシでの原発建設計画～政治的困難

ベラルーシでは原発建設計画が進んでいる。多くの国民が、心の中では反対したいと思っても「原発に反対する人＝政府に敵対する人」とレッテルを貼られてしまうことを恐れて公言しない。学校でも、



原発の安全性が宣伝されている。ベラルーシでは、集会など公にはできない。以前に他の問題で「沈黙のデモ」がされたことがあり、それからは路上で人々が3人以上集まっていれば「政治的行為」として警察が取り締まれることになった。

「移住者の会」のメンバーとの懇談から

ジャンナさんと同郷のナローブリアの出身の女性3名がジャンナさんの家に集まってきて、いろいろと話を聞かせてくれた。

移住指示が出されるまでは「自主避難」

獣医だったリュドミーラさんは、1975年生まれのお嬢さんがいて、皮膚病を患っていたが、症状が悪化し医者から転地療養を勧められた。まだ移住の指示が出る前だったので、「自主避難」ということになり、政府からの支援は一切なかった。北コーカサス地方に移り住んだが仕事もなかった。事故から5年後までは希望者は皆、自費で避難しなければならなかった。

一年後、皮膚病がよくなってナローブリアに戻ってきたが、その一年後に、ミンスクへ避難せよとの指示が出された。



移住するまで～除染、保養、汚染食品の管理

除染：

86年の秋、9月10日頃に子どもたちが保養から帰ってくるまでに、学校の庭では土地を10センチとって土の入れ替えを行った。土の入れ替えや屋根を洗うといった作業は、兵士がやっていた。

住民は自分のアパートの掃除などをやったが、これは事故前にもやっていたことを、もっと丁寧にやったということ。でも、ジャンナさんの住んでいた9階建ての建物の上の平な屋根は、除染などされなかった。

ある家は屋根を取り替えたが、その隣は何もしなかった…というようなこともあった。もちろん個々の家の放射線量は測定していたのだが、人々は、対処の違いは「賄賂によるのでは」と、噂した。

道路は定期的に洗っていた。公園は、古い木も切ってしまった。通りや児童施設で、線量の下がらないところはアスファルトで覆った。

保養：

1987年は、制度としての保養はなかったが、皆、被ばくを避けるために、自費で自発的に汚染地の外へ保養に出かけた。子どもたちを、両親や親戚に3ヶ月間、預けたりした。

1988年から、汚染地の子どもたちに年に1回の保養の権利が与えられるようになった。小さな子どもは母と一緒に24日間の無料の保養に行けるようになり、その間、親は有給休暇を取ることができた。滞在費、交通費も自己負担は一切いらなかった。ベラルーシで一時的に民主的な時期があり、その時に議員が要求して実現したようだ。

食物：

自分の農園で栽培した野菜は食べなかった。国営の店では食品の放射能が測定されていたものと信じていたので、特別な配慮はしなかった。当時、配給券が配られ、それで食品と日用品の入った袋を買った。汚染地だということで、給料は通常の2倍から2倍半も支払われた。これは核施設の専門家と同じくらいの給与だったようだ。ソ連全体が物不足の中で、汚染地では物資が与えられていた。でも誰も手放しで喜んではいなかった。「おそらく優遇されるのは、何かの理由があるからだろう」と考えていた。「赤ワインが放射能にいい」と言われ、飲み過ぎてアルコール依存症になった人もいた。

はじめの3年間ほどは、皆、恐がってきのこは食べなかった。しかし次第に慣れてきたので食べる人も出てきた。森の中には、「きのこ採取禁止」の立て札があった。

住民の要求を受けて5年後に15キュリー/km²以上の高汚染地からの移住が始まる

1990年に初めてのストライキが行われた。「ウクライナでは15キュリー/km²以上の汚染地は、移住の選択ができるのに、ベラルーシではなぜ移住させないのか」と。「チェルノブイリの道」という社会運動が地方から起こり、人々は地方からミンスクに集まり、移住などチェルノブイリ被災者への施策を要求した。このデモ行進は、その後暫く定期的に行われるようになった。(注:1キュリー/km²=37000ベクレル/m²、前ページ地図参照)

ジャンナさんたちが住んでいたのは、ナローブリアで15キュリー/km²以上の所。1991年のある日、地元の当局から指令の手紙が各家庭に送られてきた。「移住すべき。1~2週間以内に、今住んでいるアパートを地元の行政機関に引き渡し、他の都市の決められたアパートに移るように。」という内容だった。皆、汚染地を離れることを喜んでいて、移住は強制ではなく、選択の余地はあった。ジャンナさんと同じアパートの住人で、「移住したくない人」が2%くらい(98家族中、残ったのは2家族のみ)が移住せずに残った。ほとんどの人々が移住を希望した。

元々アパートでなく自分の家に住んでいた人は補助金をもらった。

政府からの移住指示の期限に間に合わなかった人、あるいは一旦移住を拒否して後で考え直して移住を希望したりした人は、希望を受け入れられず、結局、移住できなかった。

ミンスクでの生活~新たな困難

引っ越しの時のトラック使用料は1回無料で、4ヶ月分の給料を一括払いされたが、仕事の斡旋はなく、自分たちで探した。教師、看護婦、医師は、すぐに就職できたが、獣医のリュドミーラさんは、ミンスクでは求人がなく一年間働くことができなかった。一年後に、検疫所で海外からの輸入食肉の管理などに携わる獣医の職が見つかり再就職した。幼い子どもがいたが、保育園が少なかった。娘の皮膚病もまだよくなかった。

ミンスクで与えられたアパートは、4人家族は3部屋、3人家族は2部屋、2人家族は1部屋と、決まっていた。移住してから子どもが新しく生まれて手狭になっても、お金がなくて、他に移住することはできなかった。

引っ越し前には、故郷の家で使っていた全ての物について、放射能汚染がチェックされた。ベッドや鍋までも。そして汚染が高くて、持ってゆけない物もあった。自分でどうしても持ってゆきたい物とそうでない物を分類し、専門家がきて放射能をチェックした。だから移住先での生活に必要な物を全部持ってくることはできなかった。ちょうど1991年頃はソ連崩壊の頃で、物不足に悩まされ、枕、毛布などを買うためにも長い行列に並んだ。冷蔵庫や家具なども購入するまで2~3週間は待たねばならなかった。新婚さんは、何もなかった。大きな家に住んでいた人も、皆、同じ扱いだった。家畜を飼っている人は少なかったが、牛は買い上げられた。豚、羊、鶏などは、屠殺し、政府に渡さねばならなかった。中には肉を加工して持ってきた人もいた。

マリノフカの学校では移住してきた家族のために、地域の子どもの人口が急に増え、授業時間を三交代制にして対応した。

移住者たちは、初めはみんなバラバラで、隣に住む人々が何者かも知らなかった。

実際には「移住の権利」が保証されなかった5-15キュリー/km²の汚染地

5-15キュリー/km²については、病気の子どもの家族や退役軍人などには支援があったかもしれないが、一般にはなんら支援はなかった。このレベルの汚染地域で「移住の権利が与えられた」というのは、聞いたことがない。それは紙の上(法律に書いてある)のことではないか。移住するのは始めから自由だったが、移住のための支援は何も受けられなかった。

高汚染地での農業再開~汚染食品の流通

汚染地に住んでいた頃は、食物は地区内で加工して、地区内で消費し、外には流通させなかった。野菜だけでなく、バターもアルコールも。農業は部分的に禁止されていた。

事故後、3年間は、ほとんど農業はやっていなかったが、その後、徐々に再開した。集団農場は国の指示で耕作禁止し、自家栽培は自粛するよう言われた。

今では、ナローブリアでも、農業が再開されている。自分たちが移住した時には、個人農場の半分は

耕作していなかったが、ルカシェンコが大統領になってから再開され、今では100%再開されている。今ではナローブリア産の物も自由に流通している。でも私たちは、ゴメリやモギリフ産の肉やミルクは買いたくないと思っている。市場で売られる時には、必ず放射能測定をして基準値以下のものを流通させることにはなっている。モスクワなど、ロシアの方にも流通しているようだ。

人々が移住した後の汚染地にバルト三国やカザフからの移民が入居

ジャンナさん達が移住した後、ほとんどの部屋には、バルト三国から移住してきたロシア人、あるいはコーカサス、カザフ、中央アジア、モルドバなどから移住してきた人々（必ずしもアジア人でない。もと軍人とか。）、あるいは、「ジブシー」と言われる人々が住むようになった。チェチェリスク、でも同じように移住後、カザフ人が多く入ってきた。

人々が移住してしまった村部の汚染地（15～40 キュリー/km²）は閉鎖されたが、ベトカ、ナローブリアの中心部の街は、インフラがある程度整ったまま残っていたので、もとの住人が皆、移住した後、他から移り住んできた希望者が入居した。汚染地域に後から、線量が下がってから移り住んできた人々は、チェルノブイリ事故の時に被災したわけではないのに「被災者」として、保養などの特権が与えられている。労働力として政府に歓迎されたのだ。新しく入居してきた人々にはあまり病気の人はいないのに、ずっと残っていた人では有病率が高い。一方、私たち移住者は、線量の高い時期に被ばくしたのに汚染地域から出たので、なんの特権もない。

25年経った今、居住が再開できるようになっている地域もあるが、一方で未だに居住禁止の地域もある。セシウムだけでなく、ストロンチウムやプルトニウムの汚染地域もあり、それらの高い汚染レベルの地域も居住が禁止されている。

フクシマのお母さんへ～子どもたちの健康が第一

汚染地から子どもを連れて避難することは重要。理想的には移住できればいいが、できないなら保養でもいいので。特に妊婦さんは被ばくを避けるべき。放射能測定をした証明のある食品を食べるようにする。政府が汚染食品の管理をちゃんとすべき。測定した結果を公表して消費者がわかるようにすべき。特に、放射性物質を吸収する、キノコ、ミルク、骨、じゃがいもは気をつける。肉をゆでたとき、ゆでた湯を捨てると、栄養もなくなるが放射性セシウムもゆで汁に出てゆくのので有効な方法。バター、オリーブなど油脂にはセシウムは少ない。色の濃い果物は、ペクチンが多いのでセシウムの吸収を抑える。

サウナや風呂に入る、シャワーなどで身体をきれいにすることも大切。部屋に入る時には、上着を脱ぎ換えるなど、家の内外での服を区別して、放射性物質が屋内に入るのを防ぐ。

小学生の子どもたちに、帽子、マスク、綿の手袋を夏でも着けさせていた。この処置はナローブリアではしなかったが、チェチェリスクではやった。全員ではないが、ヨード剤も配布した。家の周りを、毎日水で洗った。靴を洗い、学校では外履きと内履きの区別をした。川など、外では泳がないこと。

子どもたちは大人の話で恐怖を感じてしまう。パニックに陥らせてはならない。とにかく生き抜いてゆかねば。

子どもたちの健康をできるかぎり守ること。子どもたちの健康を第一に考え、自力でも調べていろいろとやってみること。全ての不幸がこれ以上繰り返さないように願っている。

日本政府は、なるべく早く、嘘をつかずに真実を伝えるようにすべきだ。本当のことを伝えると、パニックにはならない。事実を隠せば、噂がパニックを起こすのだと思う。

今度は私たちが日本の皆さんのことを気遣って、お返しをする番

これまで日本の皆さんは、私たちチェルノブイリの被災者のことを気にかけて下さって支援してくれた。今度は私たちが皆さんのことを気遣って、お返しをする番。チェルノブイリは繰り返してはならないはずだったのに、繰り返してしまったのだから…。

「非現実的」かもしれないが、日本の子どものグループ、母親、学生、など、ベラルーシに「保養」に来てほしい。心をこめて受け入れます。アパートは狭いが、喜んで受け入れます。郊外の「別荘」で過ごしたりもして、楽しんでもらえるよう努力しますよ。

繰り返さないために～交流を深めてゆきたい

私たちのように原発事故による被ばくと放射能汚染に苦しむのは、「チェルノブイリで最後に…」と思っていたが、最後ではなかった。フクシマを本当に最後にしてほしい。残念なことに、すでに起こったことを元にもどすことはできない。これから同じ事が起こるのを許さないようにすることが重要。

ソ連政府は住民に嘘を言ったが、私たちは驚かなかった。民主的な国ではなかったし、チェルノブイリは世界で初めての事故だったから。何が起こるのか、ある意味、世界も知らなかった。しかし、日本の学者はベラルーシに来て、いろいろと調査をしたのに、なぜ被ばくのことを軽視するような発言をするのか。どうして日本の政府は本当のことを言わないのか。私たちには理解ができない。

ベラルーシの私たちに、フクシマで被災した方々に何らかの支援ができるなら、できるだけ支援をしたい。初めて事故のニュースが入った時からそう思っていた。私たちは、不幸によって共同体を作って、助け合うようになった。こういう事故を繰り返さないように心から祈っている。チェルノブイリとフクシマの子ども達を守るために、また二度と繰り返さないようにするために、今後も情報のやり取りを続け、交流を深めてゆきたい。

日本の文部科学省の「放射線について」の副読本

なぜチェルノブイリや福島事故のことについて記載がないのか。ひどい内容。このようなものは決して受け入れられない。(副読本については <http://www4.ocn.ne.jp/~wakasant/> このサイト参照。)

昨年の支援カンパの使途

学校に新しく入学する子どものいる、母子家庭で、子どもが3人以上いる家庭に、入学に必要な文具などを購入するのに使った。

年金生活者は平均100ドル/月の年金を受け取り、なんとか生活している。むしろ子どものいる若い親の家庭が、生活が大変になっている。保育園や学校では毎月12万ルーブル(約12ドル)払わねばならず、それに加えて学用品などの費用も15ドル位かかる。(クラスノポリエで聞いたところでは新卒の学校の先生でも給与は70~80ドル。)

家族が病気になると、本当に生活は大変になる。物価も上がり、薬代も10倍近く値上がりした。ジャンナさんの息子さんのパーベルさんは、知的障害、てんかんがあり、薬を沢山服用している。薬代は毎月100万ルーブル(約100ドル)かかる。パーベルさんの場合は、障害年金を受け取っているので、なんとか払ってゆける。家賃は平均30ドル/月位(水道代込み)。電気や暖房費は別。生活が苦しいので、ロシアに出稼ぎに行く人が多い。

「ベルラド放射能安全研究所」訪問～汚染地域で食品からの被ばくを減らすための活動

ミンスク郊外にある「ベルラド放射能安全研究所」をジャンナさんとともに訪ねた。「自分と子どもを放射能から守るには」の著者のバベンコ氏と、所長のネステレンコ氏が対応してくれた。

ネステレンコ所長のお話し：

「ベルラド放射能安全研究所」は、事故から4年目に設立された。4年間は、情報の統制がされ、民間団体が放射能測定のような活動はできなかった。それまでも政府は事故直後から緊急対策として、作物や水、森林の放射能測定をやっていた。汚染した井戸は閉鎖の指示が出た。設立者のネステレンコ氏(元所長で、今のネステレンコ所長の父親)は、自らも事故処理作業に携わった人。サハロフ(ロシアの科学者)、カルポフ(チェコの「平和基金」)、アダモビッチ(ベラルーシの作家)など、多くの人々の協力を得て設立された。ネステレンコはチェルノブイリ事故後、原子力の利用に反対するようになり、旧ソ連政府、ベラルーシ政府からも圧力を受けた。事故



後の4年間は、ある意味、日本の今の雰囲気似ているように思う。全国民が汚染地図を知らされたのは1992年になってからのことだった。

まずは、市民が信頼できる、安い放射能測定器を製作することから始めた。そして、汚染地域に放射能をモニタリングし管理できる地方センターのネットワークを作ることをめざし、370のセンターを作った。そこでは、地元の教師、医師、看護師などに測定器の使い方を教え、自分たちで地元の食物などの放射能を測れるようにした。そして自分たちの健康を守るために具体的に戸外ではどうしたらいいのかなどを住民に知らせる活動を行った。

当初はベラルーシ政府も、研究所の活動に資金を融資してくれたが、政治的な変化の中で次第に補助金の額が減り、ついに2005年に補助金の支給は止められてしまった。そして全国のセンターも10カ所に減ってしまっている。ベラルーシ政府は、なるべく早くチェルノブイリのことを忘れたいと思っている。新たな原発建設計画が始まったからだろう。

食品の放射能汚染の基準は政府が決めているが、各地で運用の仕方は様々。例えば、ミルクの基準は今、100ベクレル/リットルだが、ミンスクではそれより厳しい25-30ベクレル/リットルくらいでコントロールされている。しかし、これと同じレベルでの規制は、経済的理由で全ての地方で保証することはできない。例えば、以前は15キュリー/km²で農業が禁止されていた地域では、1998年頃から農業が再開されているところがある。放射能が減衰して自然に汚染レベルが下がった所だ。土地の汚染レベルは下がっても、放射能は植物など生態系に移っただけ。このような所から出荷されるミルクは基準値を上回る400ベクレル/リットルあっても、工場でもより低い汚染レベルのミルクと混ぜ合わせて基準値の100ベクレル/リットルを確保するようなことがされている。これをしないと仕事がなくなる人々が出て、失業率が上がるのでやめられないのだ。

センターでは40人の職員が働いている。これまで550以上の測定器を製作した。また800人の専門家の研修を行った。汚染地でのセミナーなど教育活動も行っている。

ホールボディカウンターを車に乗せて汚染地を巡回し、汚染地の学校などで、43万件の測定を行ってきた。この膨大なデータをどう活かすかが今後の課題。

土地の汚染レベルが低い所でも体内被ばく量が高い人もいる。ある村では、低い子どもは15-20ベクレル/kgの体内セシウム量なのに、きのこなどをよく食べたりしている家庭では、3000-4000ベクレル/kgもあった。親が生活上のアドバイスを勉強して、子どもの内部被ばくを減らす努力をしていると下がってくる。

リンゴのペクチン（皮の部分に多くふくまれる植物繊維、セシウムを吸着して腸管から体外に排泄すると言われている。）とビタミンを配合した錠剤を製造し、ベラルーシの子どもたちを守るために配布している。

また、汚染地の子どもたちの国外での保養の活動も行っている。

マリノフカの市場の「食品放射能測定所」見学

ベラルーシでは、大抵の街の市場に、食品中のセシウム¹³⁷を測定してくれる「測定室」がある。市場で野菜、果物、肉などを売りに来た生産者は、必ずこの



マリノフカの市場に並ぶ果物や野菜

「測定室」で放射能を測定してもらい、国が定めた基準以下であることを確認して、データを記入した証明書がないと売り場に出す事ができない。食品の種類によって、測定に必要なサンプルの量と値段が決められている。また市場の



野菜等を細かく刻んで容器に入れて測定器（Naシンチレータ）にかけると10分程で結果が出る



測定所では、地区の住民が自家栽培の野菜などを持ち込んで放射能を測定してもらうこともできる。一般の場合は1回の測定は約1ドル。10分くらいで結果を出してくれる。マリノフカの市場の「測定室」に、ジャンナさんの畑のキャベツを持って行って、測ってもらった。結果は「 $3.7 \pm 21.4\% \text{Bq/kg}$ 」とのこと。

市場にある食品の放射能汚染を測定する部屋

クラスノポーリエ区長さん表敬訪問

日本で、地震、津波、そして原発事故が起きたことを残念に思う。ベラルーシと同じように美しい日本の自然が汚染されてしまったことは本当に悲しいことだ。私たちがチェルノブイリで体験したことを、日本の皆さんがこれから体験することになると思う。これからも協力して困難を乗り越えてゆきたい。



ソーヌチカ幼稚園訪問～子どもたちの「社会的リスク」が高まっている

園長先生のお話：



160人の園児がいて、12のグループに別れている。職員は50人。

地域経済が立ち直れずにいる。建設会社ができたが労働者はほとんど他の州から来ていて地元の人々の雇用があまりない。農業は土地の汚染で制限されている上に、働き手の男性がロシアのモスクワなどの大都市に出稼ぎに行ってしまう。幼稚園の先生たちも週に2回位、集団農場に手伝いに行き、ジャガイモを洗ったり、洗濯をしたりして手伝っている。春と秋は仕事が多くて大変。幼稚園の職員の給与は、月に50ドル位とのこと。その他には、地域には小さな商店や、

ミルクを収集する会社、行政関係の仕事位しかない。失業やアルコール依存のため、親が子どものことに無関心になったり、貧困家庭も増えていて、子どもたちの「社会的リスク」が高まっている。

ミンスクの「ベルラド研究所」から巡回のホールボディカウンターが年に2回来て子どもたちの体内のセシウムを測定してくれている。値の高い子どもには、ペクチンを無料で配布してくれる。



今年も支援金で子ども達が使う食器や鍋を購入



楽器演奏をしてくれた「障害者センター」の子ども達

クラスノポーリエの学校

今年のノボ・キャンプに参加した子どもたち、チェルノブイリやフクシマのことを調べたり、詩やメッセージを書いてくれた子どもたち10人と交流会を持った。部屋の壁には「チェルノブイリとフクシマ」と書いた展示が張ってあった。子どもたちがネットでいろいろと情報を調べて作った壁新聞。ベラルーシの子どもたちにとって、すでにチェルノブイリとフクシマは繋がっていると感じた。

チェルノブイリとフクシマという同じ放射能被害に直面し、その「運命に抗い」ながらも、未来を担う者として、ともに命を大切に生きてゆきたいというメッセージを記した冊子をフクシマの子どもたちに…と託してくれた。冊子の表紙には、「希望」の象徴として陸前高田の一本松と「命」を象徴する空を舞う蝶々がデザインされている。

チェルノブイリ事故から25年経ったクラスノポーリエの森のキノコやイチゴは、未だに採って食べることが禁止されている。14歳のネーリャさんは、森のキノコや木の実、他の植物、川の魚などの放射性セシウムを測定する調査を行って研究発表のコンテストで賞をもらったとのこと（残念ながら報告書は全国大会に出すために提出中でデータももらってくるができなかった）。ネーリャは、イチゴは放射能で汚染されているが、煮てジャムにするなど（たぶん煮汁は一旦捨てる）すれば食べれるのでは…と考え、いろいろと実験をやってみたとのこと。

ノボ・キャンプに参加した子どもたちは、キャンプでの楽しかった思い出を目を輝かせて話してくれた。そして、支援してくれた日本の皆さんに感謝のメッセージを託してくれた。

学校では、1年生から11年生まで、命とかがわる全ての問題を扱う「市民防護」という授業がある。その中で、汚染地で暮らす子どもたちがどのようにして自らの健康を守るかを学ぶことになっている。チェルノブイリの問題については、事故がなぜ起こったか、社会がそれをどう受け止めたか、避難や移住の経過、汚染地で暮らすためにどんな対策が必要か、健康診断を受けることの重要性、汚染食品についての知識などを具体的に学ぶのだそうだ。



壁新聞には「チェルノブイリ」と「フクシマ」について調べたことが紹介されていた



今年のノボキャンプ参加者

フクシマ事故のニュースを聞いて、先生も子どもたちも大きなショックを受けた。「日本は最新の原発技術を使っているのでチェルノブイリのような事故は起こらないはず」「世界はチェルノブイリの教訓を学んで古いタイプの原発は使わなくなった」と、生徒達に教えていた教師に対する信頼がなくなった…と、先生方は話していた。また、日本の文科省が出した副読本について、子どもたちには健康に注意するように、人々の健康と命を第一に考えるように教えなければならないはずなのに、これはひどい…と、驚いていた。

クラスノポーリエの小児科医ベアラさんのお話から

(一部、副区長のタマーラさんからの情報も加えて編集した。)

除染と移住

事故後、まず15キュリー／km²以上の汚染地から除染が開始された。5月末頃からソ連軍の化学部隊が来て作業を行った。初めは「危険物」に対する知識のある軍隊が作業をした方がいいと考えられたから。その後は、一般の労働者も作業を行うようになった。特に汚染の高い所、子どもたちの施設や公園、多くの人々が集まる公共の場を優先的に除染した。除染というのは、土の入れ替え、アスファルトで覆う、屋根を洗うとか取り替えるとか。森については、除染は一切しなかった。資金もなく十分なことはできなかった。

1986年の夏からは農地の除染も始まったが、十分に効果はあがらず。結局、森林と同じく自然の減衰を待つことになった。

それぞれの地区に放射性物質の「墓地」を作って、そこに穴を掘って除染で出た汚染物を埋めた。このような場所は全国にたくさんある。クラスノポーリエ地区の場合は、ガツケービッチ村という、もともと住人がほとんどいない廃村寸前だった高濃度汚染地(40キュリー／km²以上)の村を「廃棄物置き場」に指定して埋めた。実際にどんな状態で埋めたのか、詳細はわからない。

ベラルーシは大きな国ではないが、25年経っても、全ての高汚染地にある無人の村を「埋葬」する作業が終わっていない。資金も不足している。

旧ソ連の時代に40キュリー／km²以上の汚染地はすでに強制移住させられた。15~40キュリー／km²の汚染地ではあまり除染の効果がみられず、中央政府に対する批判が高まった。その結果、1991年に新しい法律ができ、このレベルの汚染地域から移住が始まった。人々は、ソ連始まって以来、初めて中央政府を批判する行動を起こした。このレベルの汚染地から移住を希望する人には新しい住居が与えられた。15キュリー／km²以上の汚染地域に残った人々もいる。残った人々の多くは、お年寄りだった。

10~15キュリー／km²の地域は、健康にリスクがある可能性が認められ、「移住する権利」が与えられたが、実際には、移住に際してなんら経済的支援はなかったし、新しい住居も与えられなかった。それ以下で5キュリー／km²までの汚染地は、「管理区域」に指定され、手当などが支給された。

40キュリー／km²以上のところに新しい植物を植え、砂漠化して汚染した砂や水が他に流れてゆかないようにしたところもある。秋になって空気が乾燥すると、森で火災が起きることがあり、それで汚染が広がる恐れがある。

15キュリー／km²以下の地域では、特に線量の高い場所「ホットスポット」を探して、屋根を洗ったり、土壌を取り除いたりした。

汚染した森のすぐそばに村がある場合も、森の除染はしなかった。村の住民には森の中に入らないよう説明し、危険性を知らせるマークや柵をもつけ、住民が立ち入らないようパトロールをした。立ち入り禁止の森に入ると罰金を取られる。しかし、森のキノコ、木の実、イチゴ、薪(自家用、売買)などを、他の場所からも取りにくる者がいた。

避難と保養

避難の開始は、除染開始の後。5月中旬から末に、子どもたち全員をサナトリウムなどに避難させた。小さな子どもは親と一緒に。その後、これが「保養」として制度化され、1~2回／年行われるようになった。

食品汚染の管理

食品によって、様々な場所で放射能測定がなされている。例えば、薪は「森林管理局」で、肉は「獣医病院」で測定。集団農場では専門職員がいて測定している。バター製造工場では、製造したバターを集めて測定している。個人の野菜やミルクは「衛生伝染ステーション」で、希望者は無料で測定してもらえる。以前は順番待ちで行列ができるほどだったが、今は希望者が少なくなっている。このような測定システムは、1986年から組織的に開始されたと思うが、何月頃からか正確には覚えていない。はじめ



は肉製品やミルクから測定が始まった。

特に子ども向きの食品は厳しく管理がされている。生産者、製造・加工業者、消費者、各段階でチェックされる。非汚染地域の集団農場のみがベビーフードを作る資格が与えられた。保育園や学校の給食について、食材の生産者と、学校・保育所とで、中央管理化された、「食品安全管理システム」が事故の20年前からすでにあった。子どもと大人は、同じ基準を用いた。内部被ばくの重要性が次第に高くなり、また測定技術が改善されてきたこともあって、食品の基準値も次第に厳しくなってきたようだ。ベビーフードについては別の厳しい基準が設定された。

研究目的で、母乳の検査や歯のストロンチウムの測定も行われた。母乳からの乳児の内部被曝を防ぐために、赤ちゃんのことを心配した人は、個人的に食べ物に気をつけていた。病院の産婦人科では、お母さんが汚染した水を飲まないようにと、よく注意した。妊婦さんの多くは「中絶するかどうか…」と、迷っていたが、医師達は「注意を守れば多分大丈夫」と話した。超音波検査での胎児の異常のチェックは全員に行った。また、必要に応じて羊水の染色体検査も行った。超音波などの検査で異常があれば中絶することが多かった。

人々の被ばくを減らすために

外部被曝を減らすために、線量の高い所には行かないように、川では泳がないように、汚染した草木で焚き火をしないようになどの注意をした。また、内部被ばくを減らすために、きのこなど汚染のひどいものを避けるなど、何を食べたらいけないのかなどの注意をした。

その他、外出して帰ったら顔、手、口を洗うこと。外出着を替えてよく洗濯すること。靴は家の内外で履き替える。マスク、帽子を着用する。シャワーをよく浴びる。禁止された所に行かない、汚染した食べ物を食べないように、自然の放射線も減らすように日焼けしないとか日差しの強い国に行かない、家の掃除は濡れぞうきんで拭き掃除もやる…など、医者や教師なら誰でも言う、毎日の健康衛生上あたり前の注意を促した。フクシマでも汚染のレベルに応じて様々な対策が必要でしょう。

事故直後には、パニックを起こさないようにと政府当局は情報を隠した。しかし今は、「病気を予防する方がいい」という考えになったようだ。被ばくに対する反応には個人差があり、また個々で被ばく条件も違う。しかし、食品の放射能汚染のコントロールは必要だ。汚染レベルは次第に下がってくるが、できるだけ安全になるような政策を取るべきだ。

事故後の人々の健康悪化

低線量被曝の健康影響、免疫システムや遺伝的影響など、まだ全てが明らかになっているわけではない。私たち医者も、今後、どのようなことが被ばくによって起こってくるのか、まだわからないことも多い。だから、いろんな国のデータを集める必要がある。しかし、原発推進のためにデータを出したくないと考える人たちもいるかもしれない。

クラスノポリエでは、全体的に発病率が増えた。早産も増えた。検診の結果、全く「異常のない」子どもの数が減り、貧血など、なんらかの健康障害のある子どもの割合が増えた。私の医師としての個人的実感からも、発病率が増えたというように感じている。これは、子どもの検診を、厳しく広く、トータルな検査で行うようになったということも関係しているかもしれない。特に、甲状腺など内分泌の病気が目立つようになった。子どもの病気について調査研究するには、被ばくだけでなく、住んでいる場所、精神的要因など、さまざまなファクターを考慮する必要がある。

大人では、癌が増え、罹患する年齢が若くなった。また、結核が増えてきたが、これは生活条件の悪化も関係しているだろう。

「チェルノブイリの身体障害者」の証明書を発行して補助金について決定する委員会は、白血病、皮膚癌、甲状腺癌だけについて、放射線被ばくと関係があると認めている。クラスノポリエで腎臓癌を発症したある子どもについて、一度は「被曝と関係ある」とされていたのに、5年後になってその認定を撤回してしまった。

流産、死産が多い。出産率より死亡率が高い。1986年には、出産率/死亡率が16.5 / 13.6 だったが、2010年には13.1 / 19.3 と逆転してしまった。

放射能は見えないが、「大丈夫」ではなく、いつも気をつけることが重要。「目に見えない敵」と闘っているようなもの。自分の健康を大切にして、誰かに任せないように自分でちゃんと身を守ることが肝

心。癌、白血病などが「増えていない」とすれば、様々な対策のおかげで予防できているのではないかと思う。そのような「対策」が大切。

生活のこと

集団農場の労働者の賃金は23万ルーブル/月(約2300円)くらい。新卒の学校の先生で70万~80万ルーブル/月(約7000~8000円)と残業手当が少し上乗せされる。物価が上がるが給料は上がらず、生活はけっこう苦しい。

クラスノポリエの病院で

病院では、ベーラさん達に依頼され、フクシマ事故後の汚染と被ばくの現状、今後の健康問題について講演をした。「まるで隣村で起こったことのように感じる」と、参加した看護師さんの感想。



コロソク幼稚園訪問/バーリャさんの話

チェリコフのコロソク幼稚園では新しい園長先生のナターリアさんが、子どもたちと一緒に迎えてくれた。子どもたちの歌と踊りの歓迎を受けた後、お茶を飲みながら、幼稚園の先生方とバーリャさんのお話を聞いた。



この幼稚園に通う子どもたちは今、36人。親は皆、集団農場の労働者。親が失業中の子どもが10人いる。子どもが8人もいる家族もあり、経済的には難しい。親のアルコール依存症の問題もある。父親ひとりで3人の子どもを育てている家庭もある。

翌日、私たちの資金カンパで、幼稚園で使う、カーペット、食器、おもちゃ、紙など、必要なものを一緒に店舗を回って購入し、贈った。

ナターリアさん、バーリャさんも、「日本の原発では事故は起こらないと思っていた」「日本の政府は事故が起こっても情報を隠したりせず、人々を被ばくから防護する政策をちゃんと進めるものと思っていた」と、福島の実状を知り、ショックを受けていた。

福島では汚染のことを知り、悩みながらも避難できずにいる人々がいることなどを話すと、バーリャさんは「私たちも同じだった」と涙ながらに自分の体験を話してくれた。

(以下、バーリャさんのお話)

移住を断念~子どもたちの健康を気遣う

まだ息子二人が小さかったので夫と相談して、家を売って他の土地に自主的に移住することを考えていた。しかし、近所に住んでいる妹の家族は移住するだけの資金がなかった。また私も夫も、同じチェリコフに住む高齢の親の世話を将来的にしなければならなかった。自分たちの家族だけが汚染から逃れ安全な場所に移っても、ずっと気持ちが落ち着かないのでは...と夫と悩んだ末、チェリコフに住み続ける決心をした。その中で、子どもたちを被ばくから守るためにできる限りのことをしてきた。子どもは、年に2回、必ず非汚染地での保養に出す。内部被ばくを減らすために、汚染が高いと言われていたミルクの摂取を抑えた。子どもたちには高くてもできるだけ汚染していない食品を与えるように努力した。食品はすべて放射能のチェックをされたものを買うようにした。今でもキノコには注意している。知人に借りた線量計で0.04マイクロシーベルト/時以下の場所だけで採取するようにしている。

国際的な支援、連帯のおかげで自分たちの子どもを守ることができたと思っている。子どもたちはイタリアやドイツなどに保養に招待されて出かけて行った。大人たちは、お互いに子どもたちのことを心配しながら、絶望しないよう助け合って生活してきた。

子どもたちは、学校から帰ってくるととても疲れているように見えた。放射能のせいかどうかはわからなかった。川で泳いでダメ、森に行ってもダメ、散歩もダメ…と、子どもたちをとりまく環境が変わってしまったためかもしれないと思った。そこで家にいる時は、音楽を聴かせたり、心が休まり楽観的になれるように気遣った。

当時、信頼できる医師から、子どもたちを守るための具体的な指示はほとんどなかった。「汚染はたいしたことない」と言われ、内部被ばくを防ぐための食品汚染についての説明もしてもらえなかった。

汚染地外に出かけた時に、上着を他の人と並んで壁にかけようとしたら「チェルノブイリ人のコートは汚染している」と、敬遠されたこともあった。



教師として～汚染地での仕事

バーリャさんは学校の先生だったので、農村部にある高濃度の汚染地を度々訪れ、農家を家庭訪問し子どもたちを保養に出すことの重要性を根気よく話して回った。中には、ベラルーシの30キロ圏外では一番汚染の高かったチュジャーナ村もあった。農家では子どもも労働力としてあてにされているので、なかなか理解を示してもらえず保養に出したまらない家庭が多かったのが苦勞した。その他、学校の内外で上着や靴の脱ぎ変えをちゃんとやっているかのチェック、汚染地を通して、移住先の村での新しい校舎の建設状況のチェックなどもしに行った。教師という仕事のために高濃度の汚染地を度々訪問することになったので「リクビダートル」（事故処理作業従事者）の証明を与えられ、年に一度、手当が支給された（はじめ1万ルーブル、後に3万ルーブル）。チュジャーナ村に行った時は、いつも喉が痛くなり疲れがひどかったのを記憶している。

12年後に汚染と被ばくの再評価～打ち切られる被災地への施策

チェリコフ市は人口15000人だったが、事故後、人々が移住し、6700人に減り、26あった学校も12に減った。バーリャさんの家はセシウム137で1992年の汚染地図では5～15キュリー/km²の所にある（最終的に「居住可能」とされた地域としては汚染レベルは比較的高い方）。事故12年後に汚染の見直しがされ、汚染レベルは1～5キュリー/km²になり、汚染地域ではあるが「内部被ばく線量が許容線量（おそらく1ミリシーベルト/年）内と推定される」ということで、これまで支給されていた「汚染地手当」が打ち切れ、幼稚園の保育料も有料（20%）になった。残っているのは、無料の学校給食と保養の権利のみ。但し、給食の回数は日に2回から1回に減り、保養の権利も年2回から1回に減らされた。同じ汚染レベル1～5キュリー/km²の地域でも、「内部被ばく線量が許容線量以上と推定される」地域もあり、そこでは学校給食が2回/日無料になる。同じ学校に通っているのに、居住している村が違うために、給食が2回の生徒と1回の生徒がいて、学校では対応に苦慮している。

プラレスカ（児童社会保護施設）訪問～「もう一度チェルノブイリが起こった国＝日本」

プラレスカでは、事故後に生まれた世代の子どもたちとの交流なので、話の糸口をつかもうと「日本について何か知っている？」と軽く尋ねてみたところ、「もう一回、チェルノブイリが起こった国でしょ」と、11歳の女の子にあっさり



言われてしまった。あたっているだけに「ショック」だった。やはりこの子どもたちにも、フクシマのことを伝えねば…と事故前の飯舘村の写真や汚染地図、事故原発の写真、日本に54基も原発があることを示す地図などを見せながら、話をした。飯舘村の四季の美しい風景、牛、雪で遊ぶ子どもなどの写真に見入っていた子どもたちは、自分たちの故郷の自然への思いと重なったかもしれない。子どもたちは、「フクシマの子どもたちへ…」とお手紙と絵を託してくれた。

プラレスカの園長先生のスベトラーナさんとは2年ぶりの再会を喜んだ。スカーフを巻いた彼女の首に一筋の手術痕が新たにできていた。尋ねると、2年前に甲状腺癌で手術をしたとのこと。事故当時彼女は22歳だった。

孫の癌はチェルノブイリのためか？～おばあちゃんの心配と疑問



プラレスカにいる間に、「日本から医師が来る」ということをどこからか聞いたバーリヤさんという年配の女性が、3歳のお孫さんがこの春に癌（膀胱の肉腫）になって闘病中なので、相談したいことがあると訪ねてきた。「孫の病気はチェルノブイリと関係があるでしょうか。政府の委員会は、そうと認めてくれないんです…」と、涙ながらに尋ねられた。

お孫さんは、血尿と排尿時痛の症状が出てから診断がついて治療が始まるまでに3ヶ月を要したとのこと。子どもでは非常に珍しいタイプの腫瘍なので、主治医も試行錯誤で成人の治療プロトコルを参照しながら、化学療法と放射線治療を続けているとのこと。治療が効を奏して腫瘍も縮小してきているそうだが、副作用が心配と。またミンスクの病院

で治療を受けねばならないため、平日は母親と一緒にミンスクの病院にいて、週末だけチェリコフの家族のもとに帰ってくる生活を続けている。交通費は1回の往復で50ドルかかる（月4回）ので、経済的な負担も大きく、親戚皆で支えている状況。

難しい病気だが、話を聞いた限りでは主治医も適切な治療を精一杯されているように思われたので、そのことを伝え、娘さん家族とお孫さんにとっては、周囲からの支えが一番大切と思うとお話した。とにかくいろいろと胸の内を聞いてほしかったのだろう。バーリヤさんは、最後には涙を拭いて、笑顔で「来年は元気になった孫を連れて会いにきます」と行ってくれた。彼女自身も事故後に甲状腺癌で手術を受けたとのこと。

「国際原子力機関」(IAEA)も、また、今、福島で「放射線リスクアドバイザー」をしている専門家も、「チェルノブイリの健康被害は小児甲状腺癌のみ」と言うけれど…私は、決してそんなことはないと思う。そして「チェルノブイリはまだ終わっていない」ということを、今回の旅で改めて実感させられた気がする。「科学的な疫学データ」は、これから調査研究をさらに積み重ねることが必要だが、チェルノブイリでも人々は、まだ放射能汚染と被ばくと闘っている。

ターニャさんの墓参

昨年、脳腫瘍で亡くなられた親友、私と同じ歳だった「移住者の会」のターニャさんの墓参にも行ってきた。ご家族（夫と息子ふたり）は、まだ誰とも会いたくないとのこと。



ベリニチの寄宿学校訪問

ベラルーシでは、できるだけ寄宿の養護学校や子ども保護施設を減らし、子どもたちを里親が受け入れて家庭で過ごして養育するという方向に政策を変えた。寄宿養護学校（インテルナート）の数も28から15に減らされた。里親の希望者が順番待ちになるほど沢山いる。さほど高い金額ではないが、子どもを受け入れた家庭は手当を受け取ることができる。失業率が高い中で、そのことが里親希望の大きな動機にもなっているようだ。



チェルノブイリ周辺の子もたちが福島原発周辺の子もたちに贈った絵を見る「チェルノブイリ・ヒバクシャ救援関西」のメンバーら—大阪市北区で昨年12月、三村政司撮影

2012年1月18日「毎日新聞」夕刊

「希望」の贈り物

ベラルーシの子
福島へ絵画47枚

チェルノブイリ原発事故（1986年）で今も放射能に汚染されているベラルーシの子どもたちが、東日本大震災の被災地の子もたちを励ます絵47枚を寄せた。福島市内の小学校などに展示する計画が進んでいる。福島第一原発事故を心配する一方、復興のシンボルとなった岩手県陸前高田市の一本松のニュースを「希望」として、切り絵にするなどし

絵を託したのは、チェルノブイリ原発の北東約250キロのクラス

一本松の切り絵

ノボリエ地区などの学校に通う子どもたち。同地区には放射能が降り注ぎ、避難して人口は2万人から1万4000人に減った。寄せられたのは、「あなたのために」とメッセージの付いた犬の絵や現地の雪景色、多くの年賀カード風の絵など。一本松の切り絵は冊子の表紙にしてあり、13歳の女の子2人が、緑色の画用紙を切り抜き、松や飛ぶチョウを表現した。冊子の中には「故郷と別れることほとても寂しい」などと書かれている。現地を訪れ、絵を託されたボランティア団体「チェルノブイリ・ヒバクシャ救援関西」の女性医師、振津かつみさん(52)は「両国の子どもが互いに励まし、学び合うきっかけになってほしい」と願う。

【大島秀利】

人間として、子どもの将来のため、訴えていきたい

佐藤 努

3月11日、金曜日、14時46分。巨大地震は起きました。そして巨大津波。そして、原発が危ない。

穏やかだった私たちの生活が嘘のように消えて行きました。この日から私たちは原発避難民となりました。私の生まれ育った樫葉町は、海、山、川に囲まれた自然豊かなところで、人口7700人程の町です。同町は第2原子力発電所の立設自治体でもあり、そのほとんどが同町の敷地内にありました。自治体はもちろんのこと町民全体が大きく就労、生活に関わっている状況で、まさしく原発依存の町でありました。

私はこの町で、民間の老人通所介護施設で主任として勤務をしておりました。施設は5年前に町の社会福祉協議会の職員であった人間が立ち上げ、私もそこに立ち上げスタッフとして参加しました。会社は順調に進み地域からの信頼も得られていたような状況で、新たな事業展開を動き出していたところでした。

会社での私の主な仕事内容としては、すべての現場の統括、と利用者家族との相談業務でありました。

私は同町に、2歳3カ月の長女と看護師の妻と3人暮らしをしておりました。私の実家も近くにあり妻の実家はやはり避難区域になっている浪江町でした。

3月11日

午後から休みだった私は、産休の妻と自宅にいました。子供は保育園。そろそろ迎えに行こうかと思っているところでした。

14時46分 地震発生。妻を抱え、やっとの思いでマンションの外へ出ました。まるでトランポリンに乗っているようでした。全てが揺れ、アスファルトの割れるような音が続いていました。

子供を迎えに行き、妻と子供を私の実家に預け、仕事場の対応にあたりました。仕事場に行く途中私は原発のことを考えておりました。原発は大丈夫なのか？漏れたんじゃないか？逃げる事になるんじゃないか？考えるうちにものすごい不安感に襲われました。

私達は、利用者の送迎を試みました。ですが地震と津波で隣町との道路がすべて崩壊。利用者家族との連絡もつかず十数名の利用者を抱え込むこととなりました。

幸いにも施設周辺は電気が使えました。自宅からあらゆる食料を持ってきました。水は実家の井戸水を利用し、ご飯を炊き、おにぎりを何十個も作りました。そして、原発の恐怖と、私達の不眠不休の介護の夜は始まりました。

3月12日

原発の情報はテレビとラジオだけでした。避難区域がどんどん拡大。樫葉町への避難指示も時間の問題だと誰もが予測をつけられる事態だと私は思っていました。

私達は、日が昇ると同時ぐらいに自主的避難の準備をしました。

7時頃、利用者、職員、職員家族、総勢35名程で南へ自主的避難をしました。

私は途中実家に戻り、家族を連れて行こうとしました。ですが、反原発運動者である父には鼻で笑われ

ました。祖母にも笑われ、仏様をおいては行けないと拒否されました。しかたなく、妻と子供だけをバスに乗せ避難しました。それから約一時間後、行政による避難指示がでました。

私達は第一原発から 50 キロ程にあるいわき市の小学校体育館へ避難しました。避難が早かった為、なんとか利用者の場所は確保できました。ですが、すぐに体育館は人でいっぱいになり、足の踏み場もなく、トイレは外。雪もぱらついておりとにかく寒い。炊き出しに群がる人。物資欲しさの喧嘩、そして水素爆発。大パニックでした。行政側に、利用者だけでも介護ができる環境に移してくれと訴えるも、その場で無理と即答されました。

状況を理解できない認知症の方、重い疾患を抱えている方、とにかく高齢の方には最悪な環境であり、すぐに体力が奪われてしまうことは予測がつくような状況でした。

避難所での私の役割としては、現場を統括しながら、避難所の環境整備、物資運び、炊き出しの手伝いを行っておりました。

爆発により原発への恐怖は高まりました。

そして私達は、独自に避難先を探しました。

3月13日

早朝、私は妻と子を私達と共に避難する事は困難と判断し、50 キロ圏程のいわき市の親戚宅へと避難させました。

第一原発から 60 キロ圏程のいわき市内にある特別養護老人施設に避難先が決まり、燃料も確保し避難施設へと行きました。いわき市も、ライフラインがストップ、物資の調達も困難な状況の中、私達を快く受け入れて頂きました。

利用者を休ませ職員も幾らか交代で休みが取れるようになりました。

私の役割としては、主に、抱えている利用者の数を減らす事でした。その為、家族と連絡をとることに必死でした。

家族と連絡はとれるも、津波で家が流された方、燃料が無く車中泊の方、もうすでに遠くに避難されている方など、迎えに来て頂くには様々に困難な状況化でした。

3月14日

家族の居場所探し、連絡はつづきました。

お昼前、二回目の水素爆発は起きました。

黒い雨が降る。ヨウ素剤が各自治体で配られている。

外にはでるな。福島県内には駄目だと東電本社社員からの情報。

施設への物資供給も完全にストップ。

私達は利用者の避難先の確保と職員の解散を決めました。



3月15日

避難先はみつからず、早朝、あてもなく南に出発しました。利用者 5 名、職員 2 名、役員と家族、総勢 20 名程での移動でした。

移動しながら利用者の確保先を探すも厳しく、私達は県外へ。独自のルートで千葉県市原市の特別養護老人施設が受け入れて頂けるとの事で、私達は利用者を連れ千葉に行く事を決断しました。母親、親戚には、厳しく批判されました。「そこまでして生き延びたいのか？」まで言われました。

皆が原発との恐怖と戦っていました。

私は家族を助ける為には、まず利用者を安全な場所へと確保すること。自分に余裕がないと家族を助けられないと判断しました。

きちんとした説明の無いまま家族との会話は終わりました。

3月16日

16時間かけて16日未明、千葉県千葉市原の特別擁護老人施設に避難。利用者を確保して頂きました。

3月17日

燃料も確保でき、夜中中に、マイクロバスにて軽油タンクを4つ積み、家族を迎えに行きました。

その後、一軒家に20人程で生活。

私達家族は、4月1日より、同町にある幼稚園の一角にある住居に家族3人で移る。

4月27日

14:56 千葉労災にて女の子生まれる。響と名付けました。

震災から9ヵ月が過ぎ、政府は原発の冷温停止、ステップ2の行程が終了した。原発は収束したと発表致しました。

ですが、私達原発避難民は、未だに先が見えぬ将来に、ステップを踏めない方が大勢おり、悩ませているのが現状です。

原発の恐怖は今だ国民を苦しめております。

原発の恐怖、不安は日本のみならず世界にまで発展おります。

こんな悲惨な状況の中、私の町の町長は第二原発を動かしたいと願っております。雇用を生ませる事が一番の理由です。

私はこの発想が戦後発展をしつづけてきた日本の象徴だと思います。あらゆることに依存する、依存社会そのものです。一度依存してしますと抜けられない。仲間が多い程抜けられない社会です。利益を生めば生む程止められない。利益至上主義でした。

わたしはこの震災で日本が復興して行く為に最も重要なことは「人間の復興」にあると思います。依存した社会からの脱却こそが新たな世界へといける。新たなエネルギーを生むのではないのでしょうか。

福島は再生なくして日本の再生はない。避難自治体の再生なくして日本の再生はないと思います。

人間が変わらなければ何も生まれない。

私は震災後強く思うようになりました。

原発災害の当事者として、人間として、子供の将来の為、訴えて行きたいと思います。

希望の詩

作詞・作曲 サトウ ツトム

東の空に日が昇る 行く道 来る道 一本道
喜怒哀楽を繰り返し 川の流に身を寄せる
希望の空に手を上げよう 歌を楽しむ人生の歌
歌は続く

人にはそれぞれ色があり 色にはいろんな色がある
色は今日を繰り返し 素敵な絵を描くように
希望の空に手を上げよう 歌を楽しむ人生の歌
歌は続く

あー故郷 あー故郷 あー故郷

悩みに向かう道があり 楽しさゆえの分かれ道
道に迷えば海をみて 地球の青さを感じるんだ
希望の空に手を上げよう 歌を楽しむ人生の歌
歌は続く

あー故郷 あー故郷 あー故郷

歌は続く



《チェルノブイリ・ヒバクシャ救援関西創立20年にあたって》

盛会の救援関西創立20年の会に参加して、私は20年前のことを思い出していた。「チェルノブイリ事故の被災地ベラルーシに行こうと思っている」と振津さんからお聞きしたのは、病が進行していた夫を病室に見舞ってくださった春だった。2011年11月の『〈増補〉放射線被曝の歴史』発刊 中川保雄 没後20年の会で、振津さんのスピーチの中に「中川さんは私たちの中に生きている」という言葉を聞いた時、ノーモアチェルノブイリの思いが一巡したような気がした。

発足までの準備会で、振津さんは会の名称に「ヒバクシャ」を入れることにこだわられ、議論の末そのようになった。名前の通り、救援関西はさまざまな被災者支援と同時に、ずっとヒバクをなくすために反原発を訴え続けてこられた。また、毎年交流を続けることによって、チェルノブイリの悲劇をわがこととして活動する人たちを増やしてこられた。

1993年には私もベラルーシ訪問団に加えてもらって、現地の実情を知り、ベラさんやバーリャさんたちと親しく交流することができた。そうすると、不思議なことに、何か出来ることをしなければの思いが募り、職場の学園祭で「玻梨貴璃屋」というチェルノブイリ救援フリマを始めることになった。最近当時の連絡ノートが出てきたので開いてみると、すっかり忘れていたことが一気に思い出され、一緒に汗を流したメンバーの顔が次々に浮かんでくる。10月末の本番に備えて、6月から学生や事務助手さんたちと準備にかかり、学長はじめ全学の心ある教職員の協力を得、新聞社を通じて市民のみなさん

からも物品を寄付してもらい、また救援関西の応援にも恵まれ、一時は「チェルノブイリ救援フリマ」は学園の名物イベントになっていた。

会場には輪投げ、ビデオコーナー、折り鶴コーナー、井上画伯のプリクラコーナーなどを設け、多い時には 28 万円を救援関西に寄付したものだが、いかんせん、世間の価格破壊の波に吞まれて、また少子化による大学の労働環境の悪化により、10 年で店をたたまざるを得なくなった。

21 年目からの救援関西は、残念なことに、チェルノブイリと共にフクシマのヒバクに向き合うこととなり、また市民の一人一人も放射能汚染列島で生活し、子育てをする運命に陥ってしまった。そんな中、創立 20 周年の会における若者たちの威勢のいい姿に光明を見出したのは私ばかりでなかっただろうと思う。(中川慶子)

《「20 周年の集い」に参加して》

☆今回の報告を聞き、私たち日本人もこれから長い時を放射能と付き合っていかなければいけないんだと実感しました。本当は事故を起こす前から原発、核兵器が存在している以上は途方も無い時を何世代にも渡って付き合わないといけない、という自覚が必要だったと思います。

フクシマをはじめとする被爆地は全(皆)の身代わりになりました。

チェルノブイリはフクシマと国は違うけれど当事者でないと分からない事が沢山あるように感じました。この国の 3.11 は被爆地なくしては語れないですね。

日本の社会構造では東電も国も罪を認めるわけにはいかず、国民の命を守ることができません。恐らく原発事故が起こればどの国も同じだと思います。

そんな中私たちのすべきことは?の問いに頭悩まさせられます。

チェルノブイリからのメッセージ

「決して負けないで! 私たちもこうして 25 年間、生きてきました」「人々は生きなければならないんです。。。」「将来を信じて、楽観主義を忘れないで。。。」

の言葉に人は死に直面して初めて生きるという事を知るように思いました。

今の必要以上の豊かさや保障、今の社会の在り方を

私たちに問いかけられているように思います。

私たちは日々何の為に暮らし、仕事をし、この社会を作っているのでしょうか?

この社会を維持する為に多くの命を犠牲にする世の中であってはいけません。私たちは日々生きる為に過ごし、暮らし、仕事をしているはず。

津波による犠牲者に加え、これから増えていくであろう被ばくによる犠牲者。

これから多くの命が失われる覚悟と、これからの社会の在り方を個々が本気で見直さなければいけない時に来ていると思います。

フクシマの問題は犠牲者が出て初めて実感することだろうと福島に行き思いましたが、チェルノブイリの現実にこれからの 1,2 年が今出来ることをすべき大切な時だと感じました。京都でのサマーキャンプもとても参考になります。

私は農家として出来る支援をしていきたいです。

チェルノブイリとフクシマは繋がりを持って経過を見ていく必要性を感じました。



まつなが畑 松永行央

☆「チェルノブイリとフクシマを結んで」をサブタイトルとするこの集いは、山科和子代表の挨拶で始まり、20年間の歩みが語られました。チェルノブイリ原発事故から5年後に設立されたというこの会が被災者にきめ細やかな支援をつづけてこられた様子が紹介されます。その間には日本の原子力開発史上初めての急性放射線障害による死者を出したJCO臨界事故もありました。そして、繰り返し、繰り返し、「チェルノブイリを繰り返してはならない」と訴え続けてきたはずなのに、日本では原子力発電所は増設され続け、とうとう福島第一原発事故が起きてしまいました。

福島第一原発事故後、多くの人たちと同様に私もただ茫然としてしまいました。チェルノブイリ原発事故後、少しばかり反原発運動にかかわってきたはずなのに、いつのまにか大きな事故が起きる可能性を忘れてしまっていたのでしょう。他にさまざまな課題があったからなどというのは、自分を納得させるための口実でしかありません。そして、今度こそ反原発の闘いと思ったとき、長く続けてこられた方々の運動はとてありがたいものでした。

「チェルノブイリ・ヒバクシャ救援関西」の皆さんから教えていただいたことの中で、もっとも大きなことは被災者に寄り添うという姿勢です。このことは、福島第一原発事故後、まず福島へ行こう、福島の人たちの声を聴こうという行動に結びつけることができました。その後、「避難・保養キャンプ」は被災地の子どもたちにとって、心身両面での保養に有効だということも教えていただきました。汚染地域に暮らす子どもたちは当然避難しなければならないのですが、すべての人たちが避難・移住することは困難です。このことは、福島の人たちと交流する中で思い知らされました。国や行政、東電の対応を待っているわけにもいきません。いち早く5月の連休にキャンプを実施した若い世代、そして、彼らを支援し、多くの人たちに「避難・保養キャンプ」の意義を広められたのは「チェルノブイリ・ヒバクシャ救援関西」の皆さんたちでした。

「20周年の集い」では、福島原発事故後初めてベラルーシを訪れた振津かつみさんの報告が行われました。事故当時22歳だった親友との久しぶりの再会を喜んだものの、スカーフを巻いた首に一筋の手術痕が新たにできていたとのこと。チェリコフでは一人のおばあさんに、3歳の孫がこの春にガンになり、チェルノブイリ原発事故と関係があるのかどうか尋ねられました。また、事故後に生まれた子どもたちに「日本について何か知っている？」と聞くと「もう一回、チェルノブイリが起こった国でしょ」と言われてしまいます。そして、子どもたちは福島の子供たちに宛てた手紙と絵を振津さんに託し、クラスノポーリエの学校の壁には、「チェルノブイリとフクシマ」と書かれた展示がありました。チェルノブイリ被災者たちは福島の人たちのことをとても心配し、福島で抱えている悩みについても自分たちの経験が活かされるならと事故当時のことをいろいろ話してくださったそうです。

チェルノブイリ被災者への支援活動は、時を経るにつれ、一方的な支援だけでなく人と人とのつながりを深めていったことが映像からも伝わってきます。このような関係性が原発事故を媒介にして育まれたのはとても悲しいことですが、弱者の強みは損得を超えて心を通わせ、連帯することです。「フクシマ」



が起きてしまった今、私たちは連帯を一層強くし核のない世界を目ざして生き続けていくしかありません。「20周年の集い」では、まもなく90歳を迎えられる山科代表から、「ゴーワークキャンプ」を実施した20代の若者たちまでの報告や提案が続き、幅広い層の連帯に希望が感じられる内容でした。そして、このような連帯の一翼に今度こそ私も参加したいと強く感じる集会でした。(高橋もと子)

☆「毎年言っていることは今年はや言えなくなっていました」という長澤さんの言葉から集会は始まりました。

私自身は集会への参加は初めてでしたが、とても多くの方が来られて、会場は満席。ベラルーシ訪問のお土産や子供たちが描いた絵なども展示され、ロシアやベラルーシという北の大地を感じる会場でした。はじめに猪又さんから救援関西の歩んできた道のりが語られました。20年間ずっと活動を続けてこられたこと、本当に尊敬します。

振津先生のお話では「25年経っても終わっていない。むしろこれから、と感じた」と話されていたことが、ずしん、と私の中に落ちてきました。日本でも同じことが起きている。「ずしん」は、悲しみでも怒りでもなく、「覚悟」だったのだと思います。

はじめの言葉を、長澤さんがどんな思いで話されたのか。私には到底はかり知りません。長澤さんだけでなく、ずっとずっと原子力の危険を訴え続けてきた方々が、3.11をどんな思いで受け止めたのか。深い悲しみと絶望に直面してなお、まだ希望は失われていないと思います。私たちの仲間の一人は「心の世界だけは、未来を描くことだけは失わないように」と話していました。私自身は「人は何によって救われるのか」をずっと問い続けています。そのひとつの答えが「未来を描くこと」であると思います。放射線はこころの世界まで傷つけることはできないはずで、それを傷つけるのは人です。人がつくり出す社会、愛のない行為です。もちろん、こころと身体はつながっているものなので、切り離して考えることはできません。ですが、もしも放射線によって身体を傷つけられても、「生きること」をあきらめてしまわないように、それは人のこころが可能にすると思います。

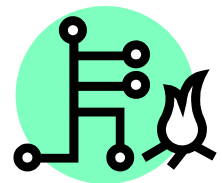
そうは言っても、原子力、放射線というものが「いのち」を根っこから破壊してしまうものであることも事実です。人々から生活を奪い、いのちを育む土や水を汚染するのだから。それは農薬やその他の化学物質についても同じことです。

今回の日本の原発事故を受けて、脱原発に踏み切る国がいくつか出てきています。当然の動きだと思えます。しかし当事国の日本は原発再稼働に向けて動き出しています。

今度こそ、もう二度と、もう二度と、絶対に繰り返してはいけません。ずっとずっと、みなさんが発し続けてきた声に、私も加わって叫んでいきます。

私たちゴーワクのまったくスマートではない報告も、みなさまじっくりと耳を傾けてくださいました。報告書も多くの方にご購入いただき、後日追加注文もいただきました。年明けに宮城を訪れた際には「みんなの放射線測定室 てとと」(<http://sokuteimiyagi.blog.fc2.com/>)のイベントでこの20周年集会に来られていた方と再会という素敵な偶然も起こりました。その小さくも確かなひとつひとつの出来事やつながりが、これからの未来につながっていくのだと、つなげていきたい、と思います。(芝奈津子)

☆個人的に会ったことがあった人もなかった人もゴーワクのことを知っていた人も知らなかった人も、新たに深いつながりができた場だったと思います。この、つながりを生かして各々得意分野で頑張っていたかなければならないと、感じた一日でした。(伊達一哉)



【ベラルーシからのメッセージ】



「移住者の会」からフクシマの被災者の皆さんへ

～私たちは生き続けなければなりません

親愛なる友人の皆さんへ！

みなさんと同じように、核の「平和利用」の「チェルノブイリ原子力発電所」によって被害を受けた遠い国ベラルーシから、核の「平和利用」の「福島第一原子力発電所」によって被害を受けられた日本のみなさんへお手紙を書いています。

皆さんの災難を自分のことのように受け止めています。現在、お互いに親しくなった国に住んでいる私たちを共通の悲しい歴史が結び付けています。私たちも、皆さんと同じように、自分が生まれ育ち、働いていた「小さな祖国」を失いました。チェルノブイリ原子力発電所の事故後 6 年間私たちは放射能で汚染された土地（汚染度は 15 から 40 キュリー/km²[訳注： 55 万 5 千～148 万ベクレル/m²、福島でも避難の指示がでていた汚染レベルほぼ相当]）に住んでいました。1991 年から 1992 年にかけてやっと政府は人々を汚染されていない地域に移住させることにしたのです。

ミンスクに 1 万人が移住し、うち 4500 人が子どもでした。1991 年から 1992 年の間に 12 万人が移住させられたのです。私たちはみんな放射能の危険性を理解していました。自分たちの子どもの健康のことを心配していました。今では孫たちの健康の心配をしています。みなさん御自身と私たち自身、そしてみなさんと私たちの子どものたちにとって未来がすべて順調であることを願っています。

私たちは汚染された地域に住んだ悲しい経験と教訓をみなさんにお伝えすることができます。どうぞ振津さんを通じて連絡をください。

私たちは日本人の勇敢さ、忍耐強さ、粘り強さ、高い道徳性に感銘を受けています。生き続けなければなりません。

みなさんの健康とご無事をお祈りいたします。

善きこと、健康、成功への祈りをこめて
現在はミンスクの「マリノフカ」に住んでいる、
チェルノブイリ原子力発電地域からの移住者の会より
ベラルーシより

フクシマ原発事故被災者の皆さん

親愛なる日本の皆さん。

私はエローザ・ジアニチといいます。12歳、7年生です

日本で起きた地震、津波、そして原発事故の被害のことに、とても胸が痛み、被災者の方々のことを思

っています。

今後、このようなことが二度と起こらないようにお祈りします。

全てが、やがてよくなりますように。

ご健康と幸せ、多くの成功を願っています。

私はダンス・サークルに行きます。ダンスが好きなんです。

私は日本が大好きです。その日本で事故が起こったことが、とても悲しいです。

これから、ほんとうに、二度と起こらないことを信じています。



チェリコフ

エローザ・ジアニチ

(訳：リュドミーラ・サーキャン)

支援への御礼の手紙

「チェルノブイリ・ヒバクシャ救援関西」の尊敬する皆様。

クラスノポーリエの障害者リハビリセンター（国立教育施設）幹部と教育者の一同は、皆様がコンピュータ用のプロセッサを購入して下さったことに大きな感謝を表します。

このコンピュータは、データベースを作るため、精神身体に問題のある子どもたちの発育プログラムの遂行、診断プログラム、精神医学教育の検査用のテスト及び診断のため、とても必要なものです。

障害者の発育と教育の条件作りにとって、皆様のご支援は、とても重要です。

今後とも、ご協力をお願い致します。またさらに相互理解が深まることを期待しております。

クラスノポーリエ

障害者リハビリセンター長

ピバノバ

カンパ・会費の納入ありがとうございました！！

2011. 12. 1~2012. 1. 20

村田三郎 麻生光枝 木村英子 山田五十鈴 斉藤日出治 壺井進 白山勝久 奥平純子 津村富代 谷川佳子
林みどり 北川諭 桧山由美子 佐野明弘 中川加代子 リュドミーラ・サーキャン 斎藤由佳 崎山昇 佐藤みえ
鹿間桂子 田中章子 鎌橋照子 木下佳子 久保きよ子

(順不同・敬称略)

